むなかた

霜月（しもつき）　第693号

目次

沖津宮本殿遷座祭・奉幣祭　3・2
明治祭　4
沖津宮・中津宮秋季大祭　4
沖ノ島祭祀　5
神宝館だより・ご案内　6
宗像大社歌会詠草　7
御造営奉賛者御芳名　7

よてす。十月十三日に沖津宮本殿遷座祭が斎行され、神様に修復を終えた本殿へ御移り頂いた。当社では式年の遷座ではなく次はいつか分からない。奉務期間中に遷座があるのは一人の神職として大変有難い事である。前述した式年とは決まった期間の事であり、皆様が周知の代表が二十年に一度の神宮の式年遷宮ではないだろうか。神社によっては遷座が二十年・三十年・四十年と期間が決まっていたり、当社のように不定期であったりと様々である。さて、十一月は全国の殆どの地域では七五三の時期である。当社では菊花展も開催されており、境内は晴着姿の幼児と美しい菊で彩られ、とても華やかだ。しかし、東北の地域によっては十月に七五三詣でを行っている。雪が降り積もる前に、幼児が凍えない様にする為である。この様に、其々の神社の故実や地域の環境等によって祭典の時期にも違いがある。最近、御朱印やパワースポット巡りが大変盛んだが、皆様には其れだけではなく、述べた様な一社一社の祭典の違いにも興味を持って頂ければ、参拝の楽しみが増えるのではないだろうか。（宗）

沖津宮本殿遷座祭・奉幣祭

沖津宮本殿遷座祭　諸前儀

平成三十年
十月　九日　午前十一時　洗清の儀
十月　九日　午後　三　時　御飾の儀
十月十二日　午前十一時三十分　清祓の儀
十月十二日　午後　四　時　川原大祓

沖津宮本殿遷座祭　式次第

当日早旦社殿を装飾す
時刻、宮司以下祭員参進
（是より先手水の儀あり）
宮司以下祭員祭場所定の座に著く
修祓

これより仮殿（末社　大神宮）

宮司一拝（諸員之に倣う）
宮司仮殿（末社大神宮）の御扉を開き
畢りて側に候す（此の間警蹕、諸員警折）
宮司祝詞を奏す
宮司神前に進み奉遷の準備を整える
諸員各其の位置に列立す
遷御（此の間警蹕）

これより本殿

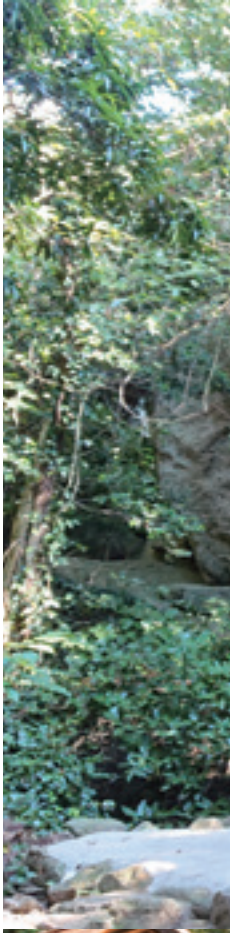
入御（此の間警蹕）
宮司祝詞を奏す
宮司玉串を奉りて拝礼（祭員列拝）
宮司一拝（諸員之に倣う）
各退出

沖津宮本殿御饌祭　式次第

修祓
宮司一拝（諸員之に倣う）
神饌を供す（此の間奏楽）
宮司祝詞を奏す
宮司玉串を奉りて拝礼（祭員列拝）
神饌を撤す（此の間奏楽）
宮司御扉を閉じ畢りて本座に復す
（此の間警蹕、奏楽）
宮司一拝（諸員之に倣う）
各退出

沖津宮本殿奉幣祭　式次第

当日早旦社殿を装飾す
時刻宮司以下祭員並びに献幣使・



十月十三日、沖津宮の御祭神は仮殿としていた末社大神宮より修復を終え、麗しく整えられた本殿へと遷御された。

沖津宮本殿は昭和七年に改造されたものが修理を重ね今日に至っており、今年二月から始まった今回の修復工事は、昭和三十九年以来の遷座祭を伴う本格的な修復であった。

奉仕員は遷座祭とそれに伴う諸祭儀の奉仕と準備のため、前日と当日の二組に分かれ渡島。奉幣祭参列の総代他関係者は当日、九時三十分、チャーターした旅客船「しおかぜ」にて、神湊港を出港。一同、沖ノ島到着後、直ちに海中禊を済ませ、各々、社殿へと歩みを進めた。

十時四十五分、遷座祭を斎行。御祭神は二月中旬より、末社大神宮を仮殿としてお鎮まりになられており、約八ヶ月振りの御還座となった。引き続き、装い新たな本殿にて初めて神饌をお供えする御饌祭を斎行。

平素、神職以外の渡島を許さない沖ノ島であるが、今回、総代他関係者約六十名が参列し、十三時より、奉幣祭を斎行。畏くも天皇陛下よりの幣帛料また、神社本庁よりの幣帛を御神前にお供えし、ここに、沖津宮本殿遷座祭諸祭儀を恙無く執りおさめた。

宗像本土から海上六十キロ、更に整備されていない階段を四百段のぼった所に鎮まる沖津宮。人を寄せ付けない地理的要因が主なるものであるが、今回の遷座祭では、奉仕神職約十名分の装束や神前に供える神饌・祭具の運搬、装束を着替える場所の選定など、平素辺津宮で行なう神事とは比較にならない大変なものであった。

沖ノ島における国家祭祀とはどのような規模で行なわれたのか。八万点にも及ぶ国宝をどんな船でどのように運搬したのか。祭祀を行なった人数はどのくらいだったのか。改めて、通説とされている岩上・岩陰祭祀などの沖ノ島古代祭祀について考えさせられるものであった。

同随員大神宮前祓所　所定の座に著く
（是より先手水の儀あり）
修祓
宮司以下祭員・献幣使・
同随員本殿所定の座に著く
宮司一拝（諸員之に倣う）
宮司御扉を開き畢りて側に候す
（此の間奏楽警蹕　諸員平伏）
宮司御幣物を奉る（此の間奏楽）
宮司祝詞を奏す
本庁幣を献ず（此の間奏楽）
献幣使祭詞を奏す
宮司玉串を奉りて拝礼
（禰宜以下祭員列拝）
献幣使玉串を奉りて拝礼
（随員列拝）（此の間奏楽）
参列員代表玉串を奉りて拝礼
（参列員列拝）（此の間奏楽）
宮司御扉を閉じ畢りて本座に復す
（此の間奏楽警蹕　諸員平伏）
宮司一拝（諸員之に倣う）
各退出

明治祭　斎行　明治維新一五〇年

十一月三日は、文化の日という祝日である。昭和二十三年に公布・施行された祝日法にて「文化の日」と制定されたが以前は「明治節」という祝祭日であった。

明治節とは明治天皇の御偉業を後世に伝えていくために、明治天皇の御誕生日である十一月三日を祝日にしたいという運動が起り、大正十四年に祝日に制定する請願運動が行われた。二万人の署名が帝国議会に提出され、昭和二年に当時の休日法「休日ニ関スル件」が改正された。昭和二十二年までの約二十年間、十一月三日は近代日本の礎を築かれた明治天皇の御聖徳を敬い祝祭日として様々な記念式典が行われていた。

今でも、明治節としてこの日をお祝いしている神社・団体等が多くあり、当社でも明治祭を斎行する。

また本年は明治改元より150年の節目にあたる。

日本は明治維新により近代的な立憲君主制の統一国家を築き上げた。後に明治大帝と仰がれた明治天皇の御聖徳によるものである。その中心には「五箇条の御誓文」があり、その精神は悠久なる我が国の伝統を継承しつつ、新しい時代を切り拓くことである。

この150年という節目の年に「五箇条の御誓文」の精神を胸に刻み、先人たちの歩みに思いを馳せたい。

―――　五箇条の御誓文　―――

一、広く会議を興し、万機公論に決すべし
一、上下心を一つにして、盛んに経論を行うべし
一、官武一途庶民に至る迄、各其の志を遂げ、人心をして倦ざらしめんことを要す
一、旧来の陋習を破り、天地の公道に基づくべし
一、知識を世界に求め、大に皇基を振起すべし

我国未曾有の変革を為んとし、
朕躬を以って衆に先じ、天地神明に誓ひ、
大いに斯国是を定め、万民保全の道を立てんとす
衆亦此旨趣に基き協心努力せよ

沖津宮・中津宮秋季大祭

沖津宮・中津宮秋季大祭（十月二十三日）は清めの雨が降る中、島内の厳島神社、御嶽神社、沖津宮遥拝所にそれぞれ神職が赴き祭典を奉仕。その後、中津宮にて大島及び辺津宮の氏子参列のもと、大島の氏子を代表して遠藤接円氏が奉幣使をつとめ、巫女による浦安舞が奉奏され秋季大祭を執り修めた。

秋季大祭の恒例となっている演芸大会は雨天の為、宗像市立大島学園の多目的ホールにて開催され大いに賑わい神人和楽の時を過ごした。

玄海灘の沖合に位置する沖ノ島は、定められた日に渡島することが困難であることから、沖津宮の春秋の大祭は沖津宮遥拝所にて斎行されている。

秋季大祭斎行にあたり、準備に連日ご奉仕いただきました沖中両宮奉賛会、同翼賛会、同敬神婦人部を始めご協力いただきました島内の氏子の皆様に、御礼申し上げます。

沖ノ島祭祀 9

― 古代の沖ノ島祭祀と神宮の祭式 ―

國學院大學　神道文化学部教授　笹生 衛

平成三十年十月、沖ノ島に鎮座する宗像大社、沖津宮の社殿修復が終わり、遷座祭が斎行された。古代からつづく沖ノ島の祭祀に新たな歴史が刻まれた。そこで、今回は、古代の沖ノ島祭祀について祭祀の次第「祭式」の視点から改めて考えてみたい。

「祭祀」は、厳格な式次第「祭式」にもとづき執り行われる。祭式は、祭祀で神に失礼がないように、穢れが及ばないよう組み立てられている。祭祀に「祭式」が必要なのは、このためである。国家から神宝が捧げられた宗像・沖ノ島の古代祭祀は、当然、厳格な祭式により執り行われたはずである。古代の国家レベルの祭祀の祭式は、伊勢神宮(神宮)の記録『皇太神宮儀式帳』で知ることができる。この記録が成立したのは、平安時代初期の延暦二十三年(八〇四年)。その内容は、八世紀から九世紀にかけてもので、宗像・沖ノ島祭祀遺跡の五号遺跡や一号遺跡とほぼ同じ時代である。これらの遺跡と祭祀との関係を考える上で、『皇太神宮儀式帳』の祭式は、直接、参考になるといってよい。

神宮で最も重要な祭祀の一つ神嘗祭の次第「祭式」を、『皇太神宮儀式帳』でたどってみよう。まず、神饌が、新米や多くの海産物を使い、厳重な潔斎のなか調理・準備され、九月十六日の夜と翌未明、天照大神の象徴、御鏡を奉安する正殿の前に供えられる。翌十七日には斎王の拝礼、朝廷の幣帛や神馬の奉納、勅使・大宮司の祝詞奏上が行われる。この主な舞台は、正殿と瑞垣御門や玉串御門などの門を隔てた広い儀礼の空間「第三重」である。多くの人々が、厳格な祭式にもとづいて祭祀を執行するには、やはり一定の広さが必要なのである。ここで祝詞奏上や拝礼などが終ると、捧げられた幣帛や神馬の鞍は、祭祀の実務担当者、禰宜以下の人々の手により、神の御鏡のそば近く、正殿や隣接する宝殿へと納められた。

同時代の国家祭祀、宗像・沖ノ島祭祀も、神宮と類似した次第「祭式」で執り行われたと考えられる。沖ノ島祭祀遺跡では、神へと捧げた神宝類は、多くが巨岩群に納めた状態で出土している。つまり、神宝を納めた巨岩群は、神宮に当てはめると、まさに神の御鏡を奉安した正殿に対応し、宗像沖津宮の神を象徴する存在であると考えられる。だから、祝詞の奏上や幣帛・神宝の奉納は、巨岩群の中ではなく、神宮の「第三重」と同様、一定の広さを備えた儀礼空間で行われたはずである。その場所の候補としては、巨岩群を仰ぐ沖津宮の社殿の西側、儀礼のための広さが確保できる一号遺跡の周辺をあげることができるだろう。

神宝館だより 19
八万点ノ国宝収蔵

前回に続き、現在、神宝館特別展「沖ノ島国宝展×藤原新也展―神息吹く巨岩と深遠の森―」で公開中の修理処理を終えた神宝を紹介したい。

まずは銅鋺。丸底と平底がある。薄い銅板を型に入れ内側からたたいて形作り、縁をはさみで切って表面を磨き仕上げている雛形の鋺である。金銅（こんどう）製雛形琴などとともに律令祭祀の影響のもとにささげられた。一号遺跡からまとまって出土した。

銅鋺は調査後、保存のための修理処理を施したが、経年劣化で、以前の接合部が分離したり、新しい亀裂が生じたため、劣化が深刻なものを再修理した。また、少しの圧で新たな破損が生じる恐れのある口縁部を強化した。さらに、一部の銅鋺の内側に貼ってある小さな金箔を成分分析した。古代日本における銅製品への金めっき法として、金を水銀に溶かした合金（アマルガム）を塗布、加熱し、水銀を蒸発させて鍍金する技法が知られるが、今回水銀は検出されなかった。本品は漆など別の接着剤で鍍金したのかもしれない。

今回の修理品展示では七号遺跡出土の鉄製衝角付冑（しょうかくつきかぶと）も公開している。鉄製の甲冑（かっちゅう）は古墳時代中期（五世紀）を代表する古墳副葬品でいくつかに種別される。大和朝廷の中枢で集中的に生産されて日本列島各地の首長に下賜された品と考えられており、大和朝廷と各首長の政治的関係を保つための重要な品とされる。沖ノ島の奉献品にふさわしい逸品といえる。いくつもの破片の状態である本品は経年による酸化進行で鉄が膨れ、以前の接合部の一部が分離したため再修理をした。また、多くの破片を観察して部位の仕分けと接合の可能性も探り、数点接合できた。（福）

銅鋺
（1号遺跡出土、8～9世紀）

ご案内

昭和の大造営を奉祝して始まり四十八回目を迎える西日本菊花大会。約二〇〇〇鉢の菊花で境内を彩ります。

また（一社）全日本菊花連盟主催の全国大会では宗像ユリックスを会場とし約七〇〇鉢を展示する。

宗像の秋を彩る菊花展是非ご覧ください。

○第四十八回　西日本菊花大会
平成三十年十一月一日～二十二日
宗像大社辺津宮

○第五十四回
（一社）全日本菊花連盟全国大会宗像大会
平成三十年十一月十日・十一日
宗像ユリックス

第687回　宗像大社歌会詠草

■大西晶子選　■毎月25日〆切

入道雲とかぐろき雲で照りかげる葉月まひるをランタナ紅し　山本　静子

八月の強い日差しと雷雲の下の花の取り合わせで、季節の印象が鮮やか。赤い花が見えるようだ。

集落の細き十字路改築の御堂にとまどう石仏達　吉﨑美沙子

改築された堂にまだ馴染まない石の仏様。二句以下〈辻に建ちたるあたらしき御堂に石仏とまどうごとし〉と。

生と死のはざまの母を見つむ吾にそしらぬふりし木々は秋いろ　北野カズミ

母と作者が大切なので下の句は単純化を。〈死にちかき母を見つめるわがうしろ窓の外には秋色の木々〉。

DNA検査で決まりし固有種の鹿の子百合咲く宗像の花圃　萩原　勉

植物もDNA検査で出自が明らかになる時代。現代らしい歌だが、二句は〈～で判りし〉に。

ひぐらしは蟬の名前でありますがその日暮らしと言えば吾輩です　山﨑　公俊

蜩と日暮らしをかけた言葉遊びを上手く使い、ユーモアとペーソスのある良い歌。吾輩につけたルビも面白い。

落ち栗を見るべくなりて深みゆく秋を感じぬ対馬見通り　佐々木和彦

対馬見通りは福津市のようだ。固有名詞が効き、落ち栗が季節感とほのかな哀感を添える良い歌。

アテネにてマラソンロード独走す初のマラソン四十二粁（キロ）　秋吉　嘉範

古代のギリシア人のように走った作者。ぜひ得難い体験を、この歌を一首目にした連作で詠んで頂きたい。

宣伝のティッシュ載き店内に入りて驚くあざやかな服に　池浦千鶴子

新しい店の予想外の色彩。二句以下〈～もらいし店に入り色あざやかな服に驚く〉と。

玉黄楊の垣橋渡る蛇の皮語るに薄い核のかけ橋　早川　祥三

作者の思いが詰まった「核のかけ橋」が分からないのが残念。例えば核軍縮協定などの具体的な言葉で。

第658回　俳句

高宮へ深妙と陰糺す風　早川　祥三

◆選者詠

月のよき秋の夜なれば菊の香の
酒をのみたしさしつさされつ

吹く風に耳が冷えるよ佳きことを
聞くのみならぬ日々のつづきて

御造営奉賛者御芳名

（平成三十年九月）（順不同・敬称略）

一〇〇、〇〇〇円

八潮市　永井　佳久

二〇、〇〇〇円

金沢市　梶谷　真康

一〇、〇〇〇円

金沢市　梶谷　眞理
神栖市　坂本　真彦
北九州市　大辻　智子
高槻市　田辺　明美
羽曳野市　谷口　勝

五、〇〇〇円

潮来市　大川有紀子
大阪市　村田　秀穂
大阪市　山本　雅清
鹿児島市　浅井　慎一
北九州市　土井　薫
熊本市　村上　絹子
小平市　三谷　果愛
小平市　佐藤真喜緒
白岡市　中村　公隆
新宿区　青木　律璃
摂津市　久下　陽子
草加市　島﨑　洋人
西東京市　衣袋加代子
広尾郡　関谷　浩介
福岡市　小島　平夫
町田市　五十嵐将司
宗像市　池上亜矢子
山鹿市　古家　弘樹

三、〇〇〇円

大阪市　福地　昭義

二、〇〇〇円

秋田市　大越　良広
朝倉市　髙橋　雅喜
北九州市　平井　健一
京都市　吉岡　巌
神戸市　山口　隆幸
佐賀市　小林　通昌
下関市　轟　加奈子
下関市　渡辺　勝
新宿区　青木　真里
新宿区　青木　英里
新宿区　青木　由里
杉並区　湯島　浩一
田川郡　村上　香織
つくば市　安達光二郎
鳥取市　重政　好弘
練馬区　新谷　高司
阪南市　谷久保公一
比企郡　上　英明
福岡市　白石裕人・成美
南足柄市　小野　祐子

むなかた
霜月（しもつき） 第693号

11月 まつりごよみ

1日	総社月次祭 引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭 宗像護国神社祭	午前11時
3日	明治祭	午前11時
15日	総社月次祭併七五三祭 引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭	午前11時
23日	新嘗祭	午前11時

編集後記

最近、電話番号を覚えることが無くなった▼スマートフォンなどの電子機器の発達により、その記憶を外部委託しているからである▼古事記は口伝により成立した。その正確性に疑問符がつくことが時として主張されるが口伝という方法が本当に正確性に欠けるのであろうか▼「わが回想のルバング島」で有名な小野田寛郎氏は著書の中で日記のような書きぶりをしている。これはメモや日誌をつけていたのではなく、頭の中の記憶をたどり書いたものであるから、驚きである。また小野田氏のお兄さんは東京大学在学中に父からノートを取らずに卒業するようにと命じられ、見事その通りに卒業されている▼加えて、伝統芸能などは技術の伝承に口伝が使われていることも少なくない▼このことから、人間に備わっている記憶力というものはかなり高度なものがあったに違いない▼電子機器の発達は、たしかに私たちの生活に利便性を与えた。それと同時になにか大きな人間としての能力を削がれているように思う。（黒）

宗像大社

2018年11月1日発行(月刊)／宗像大社 〒811―3505 福岡県宗像市田島2331 電話(0940)62―1311(代) http://www.munakata-taisha.or.jp/